

第7部 青年学級に寄せて

第1章 新人担当者として関わって

公民館学級

岡ノ谷 琉夏

私は、青年学級の方が大学にボランティア募集に来てくださったことを機に、公民館学級の担当者として関わらせていただくことになりました。最初は、右も左もわからない状態で学級に参加したため、私がこの学級に馴染めるか、学級生の方と上手く関わっていけるかなど不安だらけでした。そんな中でも、学級日を重ねていくごとに学級生の方々に名前を覚えていただいたり、日常の出来事をお話しして下さったりしたことは、とても嬉しく今でも鮮明に覚えており、学級生の方々を始め担当者の方々にも、私が青年学級の一人として受け入れてくださったことに、とても感謝の気持ちでいっぱいです。

私は昨年度からの学級活動を通して、自分自身の意見を持つことと、それを発信することの大切さを学ばせていただいたと思います。特にそのことを感じたのが学級ソングでした。誰かに意見や思いを発信すること、伝えること、それは言葉だけではないということに気づかされました。自らの思いを声で、歌詞で、体や表情で表現しようとする姿を見てとても刺激を受けました。そして、その学級ソングを聞くたびに学級生から生きる力をいただいております。また、一つの活動を0から考え作り上げていくその過程や完成したあとの達成感を実感することができ、共に活動を作り上げていくことができた嬉しさを共有できたその瞬間は忘れられません。そして、コロナ禍という人と人との繋がりが希薄化しつつある厳しいご時世の中でも、学級生の方々はいつも仲間を想う気持ちを忘れずに活動をしている姿を拝見し、集団でありながらこんなにも温かい居場所があるのだと強く実感しました。

まだまだ未熟でわからないことも多いですが、この青年学級という素晴らしい場所に出会えたことに感謝し、学級の一人として恥じないよう、共に楽しみつつ、学び続けていきたいと思っております。

土曜学級

千葉誠司

私が青年学級を知ったのは、私の進みたい道の勉強の一環としてボランティアセンターの窓口に足を運んだことがキッカケでした。発達障がいのある方の就労支援がしてみたい。そのためにはまず様々な特性のある方と出会い、触れ合い経験していくことが大切なのかと感じ、障がいがある方と交流出来るボランティア活動があるか確認した際、青年学級を教えていただきました。私は、青年学級の存在を教えていただいたその日に生涯学習センターに向かい、そのまま見学の運びとなりました。実際、あまり関わりを持つことが多くない方々との交流。不安がないかといえば嘘になります。しかし、見学をしてみた先には青年たちの生き生きとした活力と元気な笑顔がありました。初めは話しかけても視線が合わなかった方が、交流を重ねる内に徐々に視線が合い、名前を呼んでくれる。初めから興味をもっていただき話かけてくれた方が、回を重ねるごとにどんどん話す内容が増えていく。そんな小さくも大きな変化にとっても大切な気づきをいただきました。

昨年はコロナウイルスの為、活動日は決して多くはなかったかと思っております。今年度は出来るだけ活動日に参加していき、青年ひとりひとりの個性に向き合い、理解と経験を深めていければと思います。

川上昂大

私は、昨年11月から土曜学級と公民館学級のふたつの学級に参加させていただきました。参加当時は高校生でボランティア自体初めてだったため、右も左もわからない状態でしたが、沢山の方々に支えられて少しずつ知識が身に付きました。大変感謝しております。私が青年学級に参加しようと思ったきっかけは、大学で特別支援教育について勉強するため、早い内に色々なことを経験したいと考えたからです。実際、数回のみ参加でしたが、その中で学べたことや印象に残ることは多くありました。

初めて見学者として参加した際、とても緊張していてなかなか青年のみなさんに話しかけることができずにいましたが、そんな私の様子を見て青年の方から話しかけてくれたのを今でもよく覚えています。そんな優しい心を持った青年の方々と一緒に活動ができることを嬉しく思っています。コロナの影響もあり、なかなか全員が集まれませんでしたが、学級に参加した方々と沢山コミュニケーションをとることができ、とても貴重な時間を過ごすことができたと感じています。これからも、皆さんと共に有意義な時間を過ごせることを楽しみにしています。まだまだ至らない点が多いですが、一生懸命頑張りますのでよろしくお願い致します。

ひかり学級

相原 孝如

私は、ひかり学級の担当者からの紹介で3月より活動をさせていただくことになりました。私自身、「青年学級」という言葉の意味も分かりませんでした。そして、障がいのある青年たちへのサポートということを知り、このようなサポートの必要性を感じました。私は大学時代は音楽に勤しみ、しかし他のことに目を向けなかった節があり、知り得なかった分野でありました。

そして、学生などを含めた担当者たちが話し合いをしている時は、私もついていけるのかなと、恥ずかしさと不安でいっぱいでした。

日も浅いうち、最初は成果発表会という大きな行事に参加しました。新型コロナウイルスのため、何年かぶりと聞き、青年学級にとっての大切なイベントを経験しました。学生時代（十年も前ですが笑）合唱を経験しましたが、少人数でも歌を歌ったりして喜び、楽しさも分かち合うというコミュニケーションの大切さも、学ばせていただきました。

次の青年学級では、足手まといにならないか不安でした。大雨の日で、自転車に向かいました。無事に終わり、ほっとしました。

そして直近ではふれあいコンサートというまた大きなイベントがありました。とても緊張しまし

たが、貴重な経験をしました。反省すべき点はたくさんあり、日は浅いとはいえ、頑張っただけです。

どうぞこれからもよろしくお願い致します。

岩見 郁菜子

私がひかり学級に関わることとなったのは、社会教育士の称号を取得するための実習としてでした。実習先とした理由として、私は子どものころから子ども向けのボランティア活動には参加していましたが、それ以外の対象には関わるのが少なかったため、この機会に挑戦してみようと考えたこと、その年の春から障がいのある叔父と同居が始まっていたことがありました。私は叔父に会うのは夏休みに祖父母の家を訪れる時くらいであったので、突然の同居に戸惑いが隠せませんでした。そんな日々はひかり学級に中心に関わり、青年の方と過ごす中で変わっていったのです。

ひかり学級で過ごしていて最も印象的であることは青年の方々にとって学級という場所が非常に大切な居場所となっていることです。ひかり学級について話している青年の方は非常に生き生きとしており、これまでの担当者や青年の方々、職員で学びあひながら一丸となって作り上げ、それが現在まで続いているのだということが毎回の活動から感じられました。また、青年の言動について一つ一つに真剣に向き合い、そこにある思いをくみ上げようと全力を尽くす姿は一人一人を「障がいのある人」や「〇〇という病気の人」といったステレオタイプで見るのではなく、その人個人に対して同じ「人」として向き合うという、当たり前だけれども難しいことが行われていることの表れであると感じています。「居場所」というものは人と人のつながりによってできているという意見を聞いたことがあります。ひかり学級で過ごしているとそれを身に染みて実感します。

また、青年の方々と関わる中で、障がいがあり多少困難なことがあっても学級に関わる青年の方々はれっきとした成人であり、自身よりも年上の方々なのだと何度も思いました。障がいがあるから何もかもできないというようなことなどなく、一人一人が自身の意思や思いをもって全力で学級

活動に打ち込み、それを発信している様子からは、自身の無意識に持っていたステレオタイプへの気づきとステレオタイプを取り払う意識をもって関わってみることで普段の見えてくる景色が変わることへの気づきをもらいました。

そんな気づきやひかり学級の雰囲気に触れ、叔父とは今ではその日あったことを話したりし、笑い合うことができるようになりました。これからもひかり学級という場に関わり、青年の方々、担当者の皆さんとの関わりを大切に、自身も誰かの「居場所」を作れるような人になりたいと思います。未熟者ですが、ひかり学級の一員としてこれからも皆さんと同じく全力で向きあっていきたいです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

田中 優笑

私はこの障がい者青年学級のことを知ったのは大学の社会教育主事課程の社会教育実習で3か月間ひかり学級の担当者としてお世話になりました。ここで社会教育実習をしようとした理由は障がい者の方々と一緒に多くのことを学びたいと思い、ここに決めました。最初にひかり学級に行った時は、学級生と仲良く出来るかコミュニケーションを上手く取れるかが不安でいっぱいでした。ですが、最初から皆さんが私のことを良くしてくれて不安が無くなりました。段々この学級で過ごしていくうちに知らない曲やどのような考えを持っているのかもわかるようになりました。皆さんがとても仲良く毎回行くのがとても楽しく出来ました。実習が終わった後もこの学級のために何かできることがないかと自分の考えを担当者で言い合えるようになって、もっとこの学級でたくさんのことを学び、体験したことをこれからも学級生と担当者とのコミュニケーションを大事にしていきたいと思いました。多くのことを教えてもらいながらこれからも学級に関わっていきたいです。

藤野 蒼大

私がひかり学級を知るきっかけとなったのは、大学のボランティア部で募集を見たことでした。私は人見知りで自分から話しかけることが苦手です。そんな自分を少しでも変えたいと思い参加を

決めました。初めて参加した去年の7月。話せるかな、受け入れてもらえるのかなと不安と緊張でいっぱいでした。今となっては、ひかり学級は、私にとってなくてはならない存在です。

この一年間だけで多くのことを学び、成長できたと思います。友人や後輩にひかり学級はこんな場所だよと自分から話すことができ、好きなことについて話すのはこんなに楽しく、自然と笑顔になれるのだと驚いたと同時に、うれしくなりました。また、コース活動やつどいから、伝え方は人それぞれであること、日帰り旅行やコンサートからは、仲間と一緒に活動することの楽しさなど、当たり前のように抜けてしまう大切なことに気づかせてくれました。

その中でも私が一番感じていることは「行動に込められた思い」です。青年学級の中で込められた思いがよく伝わるものとして、学級ソングがあります。活動に対する思い、仲間への思い、社会へのメッセージ。これらが凝縮されたものが学級ソングだと思います。学級ソングを一日聞く機会として、わかそよがありました。青年の方々の名前をまだ覚えておらず、何をすればいいのかもわからないような時期でしたが、学級ソングを歌う青年の姿は、はっきりと目に焼き付いています。最初は「いい歌詞だなあ」と思って聞いていましたが、その歌ができた理由、背景、メッセージを知るにつれて、考えさせられ、心に響くものとなっていきました。今では一緒に歌い、思いを共有できることがとても嬉しいです。「思い」というのは、声を出しての会話や歌で聴くことにより伝わりやすいかと思います。しかし、決して音として伝わるものだけでなく、紙や手の平に書かれた文字、身振り手振り、アイコンタクトに表情、すべてのものに宿るのだと、活動を通して実感しました。手の平に、書いてくれる文字を間違いながらも読み取って、言葉を返した時に口角が少し上がった瞬間、言葉にできない思いが溢れました。このようなことは、間違いなく心が通じ合う瞬間であり、大切にしていきたいことです。

何度も参加するうちに、これでいいのかと悩むこと、後悔することもあります。しかし、それを青年と一緒に乗り越えていけることがひかり学級

の魅力だと思います。悩んで、実践して、喜びを共有する、この繰り返しが今の私を作っています。まだまだ未熟な私ですが、少しでも頼りになる、安心すると思ってもらえるよう、みなさんと歩んでいきたいと思います。これからもよろしく願いします。

宮崎 仁美

この活動には実習がきっかけで関わらせていただいています。青年学級は担当者も含め、お互いがお互いを尊重し合う素敵な場だと感じています。関わることができ、大変嬉しく思っています。

話は変わりますが、私は普段、デザインの勉強をしています。人によって説明は変わりますが、デザインとは「社会を見て、その構成要素であるモノ・コトを作ること」です。ですが私は、この活動に関わるまで、障害当事者の方と直接話したことはほぼありませんでした。本当に恥ずかしいし恐ろしいことだと思います。作り手が社会を見なくてどうするのでしょうか。こんな作り手がたくさんいると、社会は障害のある方にとって酷く冷たいものになってしまうような気がしています。そもそも既になっているように思います。

この活動を通して、社会を見る目が少し変わったように思っています。同時に、まだ見えていないこともたくさんあるように感じています。もっと多くのもが見えるよう、ここでできることをやっていきたいです。

第2章 障がい者青年学級の始まりの頃

2021年10月15日、障がい者青年学級の設立に深く関わってきた元町田市役所職員、大石洋子さんが逝去されました。大石さんは、生前、たくさん文章を残しておられますので、そのいくつかをたどりながら、青年学級の設立と発展のために大石さんがなされたことを振り返ってみたいと思います。

社会教育課



1943年に生まれた大石さんは、東京大学教育学部で社会教育を専門的に学び、1971年に町田市教育委員会の指導委員として着任の後、11月に町田市職員として採用されました。その経緯の詳細はわかりませんが、その社会教育についての専門性が求められての採用だったことは間違いありません。

青年学級が始まるのは、1974年のことですが、それまでの3年の間に、大石さんは、婦人学級、勤労青年の青年学級、家庭教育学級といった社会教育の実践に精力的に取り組んでいます。住民が社会教育という場で学ぶということが、当たり前を追及されていた時代のことです。

そして、1974年の障がい者青年学級の開設を迎えるわけですが、その開設の経過を大石さんがまとめた文章があります（雑誌『教育』1975年）の

で、少し長い引用となりますが、貴重な時代の証言として掲載させていただきます。

1973年3月、町田市にある障害者をもつ親の連絡組織である育成会の代表、福祉事務所長・ケースワーカー・精薄相談員、社会教育課長と社会教育主事のメンバーで、過去数年来親たちから要請の出されていた「障害者のための青年学級について」というテーマではじめて話し合いがもたれた。そこでは、親の側から「学校を出ても行くところがない子どもたち」「就職しても差別され、バカにされ、だまされる…」「何とかあの子たちが非行化しないため」等、多様な理由から「一回でもいいから福祉ではなく社会教育の窓口で青年のためのつどいを開いて欲しい」という切実な要求が出された。そこで話されたことは、青年対策の対象として、あるいは「厄介者」としての青年をどうするかということであり、発達を保障する教育を要求してのものではなかった。

当時、社会教育課では職員の人員減のなかでこの要求に応えるべきかどうか、労働条件の問題を中心に討議されたが、多くは消極的であり、将来開設すべく時間をかけて準備をしていくということが確認されたただけであった。それから約一年間、担当者として企画立案をまかせられた私は、『障害者問題研究』一号・二号を読み「ゆたか共同作業所」と「宮津青年学級」を訪れた。また、都で催される「特殊青年学級研修会」（年に一、二回）に参加したり、社会教育全国研究集会で「社会福祉と社会教育」の分科会に出席し、各地の実践について、とくに住民

の側で行なわれている実践について学んだ。

10 月初旬に訪れた宮津青年学級での青年たちの輝くように明るい顔と集団形成のなかで主体者としての青年の自立が「生きる力、働く力を身につけるために」行なわれている週一度の学級によるものであるのを目のあたりに見た時、「これならやれる」という気持を起こさせた。すなわち、それまで、労働観・社会観を学習し、仲間づくりをすることを目ざす学級にとりこんでいた私にとって、とくに「主体形成」の面で、どう取り組んだらいいのか分からなかったのであるが、宮津青年学級はその解答を明らかにしてくれた。

しかしながら「ゆたか作業所」「宮津青年学級」は、民間で障害者の親や教師や指導員そして青年自身の長い運動のなかで形成されてきたものであり、行政が親たちの運動がまだ十分熟さないうちにどのようにとりこんでいかに悩みは大きかった。すなわち、行政の先取りから住民の運動の芽を摘み、主権者意識を失わせることを多々見かける。そのようにならないためには、青年や親たちの話を聞き、そしていま青年はどんなくらしをし、何を求めているかを知らねばならなかった。そして、そのために行政事務として、あるいは公民館事業として、一歩住民の側に踏み出すことになった。

大石さんにとって、まず、障がい者の社会教育は、「青年対策の対象として、あるいは『厄介者』としての青年をどうするかということ」ではなく、「発達を保障する教育」でなければならないと考えられた。そして、大石さん自身の町田市での社会教育の経験は、「労働観・社会観を学習し、仲間

づくりをすることを目ざす」取り組みであったので、「主体者としての青年の自立が「生きる力、働く力を身につけるために」行なわれている週一度の学級によるものであるのを目のあたりに見た時、「これならやれる」という気持を起こさせた。」というのです。

障がい者の社会教育という未踏の世界に、大石さんが、これだけのしっかりとした見通しをもって、一歩を踏み出していったという事実には驚かされますが、大石さんは、当時、まだ 30 歳になったばかりだったということにも驚嘆させられます。

また、細かな経緯はわかりませんが、しっかりとした予算措置もなされ、ボランティアによる運営ではなく、相応の謝礼が払われる仕事として担当者が位置づけられて、他の障がい者青年学級では類を見ないきっちりとした体制が生まれ、今日にいたっています。

なお、引用した文章は、青年学級開設直後に書かれたものですが、『教育』という雑誌は、教育界では知られた雑誌でしたから、こうした大石さんの取り組みが、すでにその世界では注目されていたものだったということにもなるでしょう。

2. 若葉とそよ風コンサート始まりの頃

こうして、始まった青年学級ですが、筆者が参加した 1981 年には、担当者体制は学生を中心としたものとして確立していました。毎週開かれる会議での熱のこもった議論、長時間をさいて行われる年度末の総括など、たいへん新鮮に映りました。

また、大石さんは、経験にのみに頼るのではなく理論的な学びもたいへん重視しており、毎月開

かれる学習会では、発達保障や社会教育の諸理論などが学ばれていきました。

1980年代に、自治や生活、文化といった実践の重要な柱とされるものを確立していったのは、こうした背景からでした。

また、この当時、多摩地区の障がい者青年学級のスタッフの学習の場というものも存在しており、方向性をめぐる議論がありました。議論の相手は主として国立の公民館でしたが、障がい者青年と若いスタッフとが共に対等に活動することを重視していた国立に対して、担当者が学びながら実践の方向性について議論を重ねていく町田のスタイルは、対照的なものでした。私たちもまた、障がい者青年とスタッフとが共に対等に付き合うことを求めていることに変わりはないのですが、担当者だけで学習会を開き、担当者会で議論するということは、外から見ると対等とは異なるものと映ったようでした。しかし、一定の責任と専門性をもって障がい者青年と関わることと、対等にかかわることは、本来矛盾するものではありません。むしろ、きちんとした議論をふまえて責任をもって関わることによって質を高めていくことこそが、障がいのある青年の本来の姿を引き出すのであり、その次元で求められる対等の関係こそが、重要であったのではないかと思います。

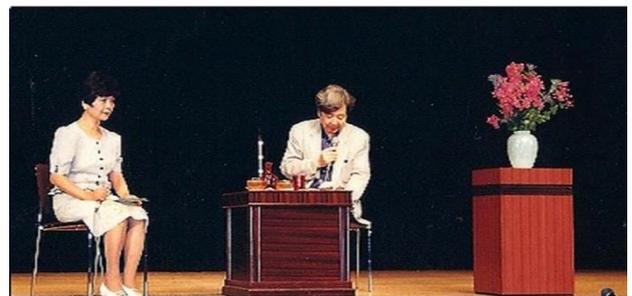
そんな中、1987年の夏、大石さんは突然、脳梗塞で倒れました。激震が走ったと言ってもよいでしょう。お二人のお子さんを支えるために学生スタッフも奔走しました。幸い、後遺症は残ったものの、仕事にも復帰でき、ことなきをえたのですが、この時の大石さんは、当時、片麻痺の高齢の学級生がいらっしまったのですが、その人に「私

もあなたと同じになりましたよ」と明るい口調で語ったのでした。それは、後遺症をめぐるマイナスの思いよりも、障がいのある人々と対等になれたことにプラスのものを見ていたということだったのででしょうか。

2004年に東京大学で行なった講義をまとめた「町田の社会教育とともに」という文章には、次のような箇所があります。

「一九八七年に、私は仕事で出張しているときに炎天下で倒れました。九死に一生を得て、障がい者として職場に復帰するまでの時間は半年でした。障がい者になって何が一番悲しかったかというところ、ハイヒールをはけなくなってしまうことでした。いつでも走り回って、いろいろな仕事をかけもちでやっていましたが、走るができなくなりました。」(月刊『社会教育』2004年7～9月号)

ハイヒールがはけなくて悲しいとは書かれているものの、障がいを負ったことが人生そのものには何のダメージを与えていないと宣言しているかのようでもあります。実際、大石さんから泣き言のようなことを聞いたことはありませんでした。



平和と憲法と私の映画 山田洋次監督と市民ホールにて

若葉とそよ風のハーモニーコンサートが始まったのは1988年のことですが、この第1回目のコンサートの準備は、ちょうど、大石さんの闘病の時

期と重なっていました。学級開設から15年目となった年でしたが、大石さんたちが開設当初に掲げた「地域で主人公として生きる」という青年学級の理念は、このコンサートを通じて、一つの答えを得たと言ってもよいでしょう。



3 多様な社会問題への視点

大石さんが、公民館で取り組んでいたのは、障がい者青年学級だけではなくありませんでした。1997年に市民大学に異動になったのですが、異動前の公民館でも、異動後の市民大学でも、平和問題など様々な取り組みを展開していました。

私たちは、こうした取り組みが青年学級との関係を十分に構想することができていなかったのですが、2004年にとびたつ会が発足すると、大石さんはとびたつ会の支援者となり、そうした成果が少しずつ、とびたつ会にも持ち込まれるようになりました。今、とびたつ会と青年学級では、自分たちの問題を訴えるだけでなく、広く社会問題に目を向ける広がりを持つようになりましたが、その背景には、障がい者の問題のみに限定されない広い社会教育の視点があったと言ってもよいのではないのでしょうか。

今年、ウクライナの戦禍のことなどもあって、私たちは、「生きてゆこう」に新しい意味を感じながら歌っていますが、この歌のもとになったもの

は、広島で原爆に被爆した町田市在住の助産師、神戸美和子さんにお話をうかがったことが直接のきっかけとなっていますが、こうしたつながりは、公民館で行なわれてきた平和学習の中で培われてきたものですが、そうしたつながりは、大石さんが時間をかけて作り上げてきたものだったと言ってよいでしょう。

4 おわりに

障がい者青年学級は、学級生と担当者、保護者などの力がたくさん集まってここまで続けられてきたものですが、その活動がここまで継続できた背景には、開設当初にきちんとした理念を据え、しっかりとした制度的な裏付けがあったことが小さくありません。

制度としての青年学級は、障害者権利条約の批准によって、障がい者の生涯学習に光があたるまで、長い間、その意義がきちんと議論されることはありませんでした。

しかし、私たち町田市障がい者青年学級は、半世紀にわたって、単なるボランティア活動やレクレーション活動ではない、社会教育としての活動を続けてきました。創設に大きな力があつた大石さんのご逝去を機に、改めて、大石さんの足跡を振り返り、私たちがもう一度何を学ぶべきであるかを再確認できたらと思います。

